

「遭難ラスト屋上デパート」

村井 真也

登場人物

伊藤 直哉(28) デパート屋上管理人
古田 浩志(56) デパートオーナー
大内 健司(18) 浪人生
岡 恵子(25) フリーライター
明津 来実(5) 保育園児
遊佐 透 (21) 大学生
笹木 真奈(20) 大学生
嘉数 章之(36) 古田の秘書
買い物客
救急隊員

○古田デパート・屋上（昼）

三毛猫の顔。

古田「（の声）なんなんだ、これは？！」

春。平日の昼下がり。

都市部から離れた駅の傍にある8階建てのデパート。その屋上には人工芝が敷かれ、片隅にひな壇のステージ。

8階へと通じる建物の横に、屋根の付いたゲームコーナー。

そこで遊んでいる、軽そうな大学生の

遊佐 透(21)と、笹木 真奈(20)。

遊佐「いや（UFOキャッチャーの）アーム

弱すぎでしょ」

真奈「いけるって」

フェンスの傍にはいくつかのベンチ。

公園にあるような遊具もいくつか置かれて
れている。

ベンチの一角に座る、若妻風の岡 恵

子(25)に

来実「おかきーん」

と、ジャングルジムの上から手を振る、
保育園児の明津 来実(5)。

そんな屋上の片隅で、デパートの社長、
古田 浩志(56)が猫をつかみ、息を切
らしながら屋上の管理人、伊藤 直哉
(28)に問い詰めている。

古田「なんだ、これは？ 言ってみろ！！」

伊藤「…ネコです」

古田「なんで猫がここにいるのかって聞いて
るんだ？！」

伊藤「ええと、それはどこから入り込んだ
んじゃないでしょうか？」

古田「屋上に？ ネコが？」

伊藤「はい」

古田「そんなわけあるか！」

伊藤「大丈夫ですか、ずっと息上がってます
けど」

古田「誰のせいだ？！」

古田のジャケットを持ち、ずっと後ろ
に控えていた秘書の嘉数（かかず）

章之(36)が後ろから声をかける。

嘉数「すいません、本来であれば私が捕まえるべきものを」

古田「お前は体調が良くないんだから、ムリするな」

伊藤「嘉数さん、どつか悪いんですか？」

嘉数「いやあ、もともと心臓を患ってまして、

最近またちよつと…」

伊藤「ああ、そうだったんですね」

古田「嘉数の話はいいんだよ！」

伊藤「でも猫の侵入先を僕に聞かれても」

古田「じゃあそれはなんだ？」

と伊藤の足元、猫のエサ入れを指さす。

伊藤「…エサ入れです」

古田「飼ってるだろ！」

伊藤「飼ってません」

古田「本当だな」

伊藤「本当です」

古田「よし、捨ててこい」

と嘉数にネコを渡そうとする。

伊藤「（すがるように）ニャン吉い！！」

古田「（猫を伊藤に向け）飼ってるな？！」

バツの悪そうな伊藤の顔。

伊藤「…まあ、結果的には」

古田「閉鎖だ」

伊藤「待ってください！ 本当にニャンき」

古田「ネコの問題だけじゃない。この屋上を維持させるのにもそれなりに経費が掛かるんだ」

伊藤「それは…わかってます」

古田「わかってない。今時、屋上遊園地を来

店動機にする客なんていないんだよ」

伊藤「でも少なからず」

古田「少なすぎると言ってるんだ！」

閑散としている屋上の風景。

伊藤「…はい」

古田「ただでさえ屋上は、飛び降りだなんだってリスクもあるのに」

伊藤「でもこの屋上で飛び降りなんて」

古田「起こってからじゃ遅いんだよ！」

伊藤「そのために僕がいるわけで」

古田「その人件費を出してるのも俺だ！」

伊藤「だけど自殺なんてそうそう起こるものじゃ」

言い争う2人の隙間から金網をよじ登ろうとしている大内 健司(18)が遠くに見える。

伊藤・古田「わああああ！！」

それに気が付いた古田(猫は嘉数に)と伊藤が駆け寄り、大内の背中を引つ張り落とす。

人工芝に転がる3人。

古田「(息切れ)な、なにをやってるんだ、キミは？！」

大内「ほっといてください！」

伊藤「ほっとけるわけないでしょ！」

古田「そうだ、うちの評判が落ちたらどうするんだ？！」

伊藤「そういう問題じゃないです！」

古田「そういう問題だ！ やはりつつと閉

鎖にして」

伊藤「だからそんなすぐじゃなくても」

古田「雇用の問題があるなら一か月の」

大内「…（また金網に手をかける）」

伊藤・古田「！（同じように阻止）」

また人工芝に転がる3人。

古田「（息切れ）…だからなんなんだ、君

は？！ 死にたいなら他の場所で死ね！」

伊藤「そんなこと言っちゃダメでしょ！」

嘉数「（追いつき）社長。そろそろ時間が」

古田「車を出しておけ。すぐに行く」

嘉数「あの、このネコは…」

古田「外で離せば、どこか行くだろ」

嘉数「わかりました」

伊藤「ニャン吉！！」

嘉数が出口に向かい、伊藤が追いか

ようとしたところで、また大内が金網

をよじ登ろうとする。

古田「（伊藤を呼び止める）おい！」

伊藤と古田で、大内を引きずり落とす。

転がる3人。

古田「（息切れ）わかった。事情を聞こう：

伊藤君」

伊藤「（息切れ）はい：」

古田「聞いとけ」

伊藤「え、社長は？」

古田「さつき自殺抑止は自分の仕事だって、

言つてただろ」

伊藤「じゃあ彼を助けたら、閉鎖は！」

古田「閉鎖は、する。それとこれとは別問題

だ」

伊藤「そんな！」

古田「私は帰る（立ち上がり踵を返す）」

伊藤「社長お！」

古田「（振り返り）そいつから目を離すな！

またよじ登るぞ（と出口へ向かう）」

大内のもとに取り残され、ため息をつ

く伊藤。

大内「：すいません、なんか」

伊藤「いやキミのせいじゃないし」

大内「あの…じゃあいいですか？」

伊藤「なにが？」

大内「死んでも」

伊藤「ダメだよ！ なに言ってるの？！」

大内「でも閉鎖するなら」

屋上出入り口付近。古田が階段に通じるガラス戸を開けようとするも、開かない。

古田「ん？」

ガチャガチャと強引に押し引きするが、やはり開かない。

古田「くっ！」

出入り口から離れたフェンス傍で会話をしている伊藤と大内。

伊藤「で、なんで死のうと思ったの？」

大内「…色々あったんです」

伊藤「そりゃ生きてれば色々あるけどさ」

古田「（遠くからの声）おい！！」

伊藤「具体的に話してくれないと、こっちも相談に乗れないでしょ？」

大内「別に相談なんて」

古田「（の声）おいっ！！」

伊藤「年はいくつなの？」

大内「…18です」

伊藤「高校生？」

大内「あ、いや」

伊藤「わかった！ 受験に」

古田「（近づいていて）おいっ！！」

伊藤「あれ、社長。まだいらっしやっ…」

古田「あかない」

伊藤「はい？」

古田「扉が開かないんだよ」

伊藤「開かないって」

古田「いいから来い」

伊藤「ええ？」

古田「君もだ」

大内「僕も？」

古田「離れるとまたやるだろ」

大内「でも」

古田「来い！！」

○同・階段

ネコと上着を持った嘉数が階段を下りている。

嘉数「…うっ」

踊り場で突然、膝をつく嘉数。

倒れざまにネコがスルリと嘉数の腕から抜け出す。

倒れる嘉数に気がつく付近の買い物客。

客「大丈夫ですか？」

倒れたまま動かない、嘉数。

客「誰か！！」

○同・屋上

ガラス戸の前に立つ3人。伊藤が開けようとするもビクともしない。

伊藤「…ああ、壊れちゃってますね」

古田「壊れてるって、お前」

伊藤「いやこの屋上、色んなところがガタついてるんですよ」

古田「ちゃんと整備してないからだろ」

伊藤「僕はちゃんと報告してますよ。でも稟議（りんぎ）が…」

古田「よし、わかった」

と近くにあったモップを手に持つ。

伊藤「ちよ、ナニする気ですか?!」

古田「割る」

伊藤「いやいやいや!」

古田「丁度いい。このまま閉鎖にしてやる」

伊藤「やめてください、社長!」

古田を止める伊藤。

○同・屋上入り口前の階段踊り場

屋上の入り口前まで駆け上がったネコ。

ガラスの扉越しに揉みくちやの3人が見える。ネコに気付く伊藤。

伊藤「あ、ニヤン吉!」

ネコ、高くジャンプ。前足がシャッターボタンをとらえる。

伊藤「え、あ…」

ガラガラとガラス扉内側にシャッター

が下りていく。

○同・屋上

徐々にシャッターが下へと下がり、最後にはガラス扉越しのネコが見えなくなる。

伊藤「ニヤン吉いっ！」

ひざまずく伊藤。

呆然とする大内と古田。

古田「…おい」

伊藤「はい？」

古田「これ、どうするんだ？」

伊藤「どうするって」

古田「シャッターはどこで開けるんだ？」

伊藤「あ、内側からしか開けられません」

古田「な…！」

遊佐「あの」

古田と伊藤が振り返ると、客の一組である遊佐と真奈がいる。

遊佐「降りたいんですけど」

伊藤「え、あ、えーと：少々お待ち下さい。

（古田に）どうしましょう？」

古田「内線があるだろ。下の奴に」

伊藤「内線も壊れてます」

古田「じゃあ携帯で」

伊藤「『就業中は携帯持つな』って社長が言
ったんじゃないですか」

遊佐「あの、どうかしたんですか？」

古田「どうもしてないですよ。もう少々お待ち
ください」

と、ワイシャツの胸ポケットやズボン
を漁る古田。

古田「ん？」

そこへ母親風の恵子も近づいてくる。

恵子「なにかあったんですか？」

伊藤「いや、あの、ちよっと手違いでシャツ
ターが下りちゃいました」

古田「おい、俺の携帯はどこだ？」

伊藤「え、知りませんよ」

恵子「手違いって言うのは：？」

伊藤「にゃんき、ネコがこうシヤッターボタ
ンを押ししてしまつて」

真奈「ネコが？」

伊藤「そうなんですよ！ 嘘みたいなホント
の話で」

古田「おい、伊藤君」

伊藤「なんですか？」

古田「俺の携帯：あ、上着の中だ」

伊藤「上着は嘉数さんが」

突然、下から救急車の近づく音。

全員「（サイレンの音を聞いている）」

デパートの前で止まる音。

大内「なんか、近くで停まってませんか？」

伊藤「ていうかウチの前で停まったような」

古田「そんな、まさか」

近くのフェンスに移動した一同が、下
を覗こうとする。

真奈「よく見えない」

恵子「その（備え付けの）双眼鏡は」

遊佐「それは角度的にムリなんじゃ」

伊藤、双眼鏡をあつさりと外し

伊藤「どうぞ」

と、真奈に渡そうとする。

古田「なんで取れるんだよ?!」

伊藤「壊れてるので」

古田「ああっ!! もういい、貸せ!」

奪い取った双眼鏡で覗くと、タンカで運ばれている人間にかけられた布が風でめくれる。

そこには気を失った嘉数の顔。

古田「かかず?!」

更に風で布が飛ばされると、嘉数の体に掛けられた古田の上着が見える。

古田「俺の上着!!」

救急車の中に運ばれ、扉が閉まる。

古田「おい! ちょっと待て!」

走り去る救急車。

呆然とする古田。

少し離れた所由来実の乗っているパンダの乗り物から流れる音楽が、救急車

のサイレンとクロスフェードで聞こえる。

伊藤「…ねえ」

と、大内に後ろから声をかける伊藤。

大内「あ、僕ですか？」

伊藤「携帯、かしてもらえないかな」

大内「あ、すいません。携帯は…うちに置いてきたんで」

伊藤「そっか、そうだよね。（恵子に）すいません、携帯貸していただけませんか？」

恵子「携帯ですか？ はい（と取り出そうとして）…ああ、ごめんなさい。今、充電切れちゃってて」

古田「（双眼鏡から目を離し）おい、なにをやってるんだ？」

伊藤「いやお客様から携帯を借りようとして」

遊佐「携帯があれば、シャッター開くんですか？」

伊藤「下のフロアに電話できるんで」

古田「そんな情けないことするな」

伊藤「でもそうしないと」

真奈「あの、だったらこれ使ってください」

と携帯を差し出す。

古田「…いいんですか？」

遊佐「あ。じゃあ、あそこの中（UFOキャ

ツチャー）のやつ一個くださいよ」

伊藤「え、それは（と古田を気にする）」

真奈「ちよ、やめなよ」

遊佐「いいじゃん。電話だって金かかるし」

真奈「それくらい別に」

古田「いやいや！ どうぞ、どうぞ。一個と

言わずいくらでも」

伊藤「ちよつとそれってどういう意味で」

遊佐「こう言ってくれてんだし、ほら」

と遊佐が真奈の携帯を奪おうとして、

手が滑る。

遊佐「あ」

放物線を描き飛んでいく携帯電話。

落ちた先で間髪入れずパンダの乗り物
に潰される携帯。

真奈「ああっ！！」

そのままパンダを動かす来実。

来実「おかさーん！　なんか踏んだー！」

恵子「（近寄り）来実ちゃん、降りて！」

と、来実を抱っこして下ろす。

他の人たちも駆け寄り、伊藤がパンダの下から携帯を取り出す。

割れている画面。

伊藤、おもむろに真奈に渡す。

真奈「（携帯をいじり）：つかない」

恵子「すみません！！」

伊藤「いや、これはうちの責任です。すいませんでした」

遊佐「ついでにお前も買い換えれば？」

真奈「（にらみ）：透がお金出してね」

遊佐「なんで俺なんだよ？！」

真奈「あんたがすっ飛ばしたからでしょ！」

遊佐「いやでもこの人（伊藤）が」

恵子「それでしたら私が弁償します」

伊藤「いやここの責任者は僕ですから、僕が

弁償…」

大内「あの、結局シャッターは…」

一同「…」

遊佐「そうだよ。弁償も何も電話できないんじゃない
じゃ」

古田「キミは持ってないのか？」

遊佐「あ、俺は今日、買い換えに来たんで」

伊藤「携帯の？」

真奈「はい、それで手続きの時間つぶしに屋
上で遊んでたら」

伊藤「こうなった、と」

古田「ちよつと待て。それじゃあ、今ここに

電話が一つもないってことか？」

伊藤「ああ…そうなりますね」

大内「それってつまり…ここから出られない
ってことですか？」

伊藤「まあ、平たく言うと」

恵子「非常階段とかは？」

伊藤「避難はしごがあることにはあるんです
けど…」

遊佐「どこに？」

伊藤「ちようど、その、下に」

と伊藤が指差したのはフェンスの外側。

覗くとボロボロのハシゴが見える。

真奈「これは：」

大内「ムリですよ」

古田「よし、伊藤君」

伊藤「はい」

古田「いけ」

伊藤「は：いやいやいや！」

古田「こういう時の、責任者だろ」

伊藤「そんな！ 落ちますよ！」

古田「その時は俺が責任を取る」

伊藤「勘弁してくださいよ、社長お」

古田「死んだら屋上に記念碑立ててやるよ。

閉鎖するけど」

伊藤「意味ないじゃないですか！」

恵子「別の方法を考えませんか？ もっと安

全に降りられるような」

伊藤「そうですよ！ そうしましょう！」

遊佐「叫べば下に聞こえるんじゃないかね？」

真奈「誰かー！！」

遊佐「おーい！！」

思い思いに下に向かって叫ぶ一同。

しかし反応はない。

伊藤「ダメか」

大内「意外に聞こえないもんですね…」

古田「くそっ」

真奈「でも思ったんですけど、そのうち誰かが気付くんじやないですか？」

遊佐「ああ、閉店時間になれば見回りの人が来たりとか」

伊藤「しません」

恵子「どうして？」

伊藤「僕が兼任してるんで」

一同「…」

古田「じゃあ、どうするんだ?!」

伊藤「だからなにか下の人と連絡を取る手段があれば」

大内「紙を丸めて下に落とすっていうのはど

うですか？」

真奈「『ヘルプ』って書いて？」

大内「あ、はい」

古田「伊藤君、紙」

伊藤「メモ帳でいいですか？」

古田が伊藤のメモ帳を受け取り、『至急誰かデパートの屋上に来られたし』と書いて、一枚破る。

遊佐「なんか果たし状みたいなんっすけど」

真奈「いいんじゃない？ 意味わかれば」

古田「よし」

古田、メモ用紙を丸めて下に投げる。
とそのまま風にあおられ、あらぬ方向に飛んでいく。

伊藤「あーあ」

大内「そうか、屋上は風が強いのか」

どんよりとした空模様。

恵子「雨も降りそうだし、紙一枚じゃ拾って
もらえないかもしれないですね」

遊佐「じゃあさ、あのガチャガチャのカプセ

ルに入れるってのは？」

来実「下の人に当たったら危ないでしょ」

遊佐「ああ、そっか」

真奈「なに小学生に指摘されてんのよ」

遊佐「なー？」

来実「まだ小学生じゃないよ」

伊藤「え、じゃあ」

恵子「保育園です」

古田「おお、しっかりしてるなあ」

遊佐「お母さんも若くて綺麗だしいいなあ」

真奈「透君？」

遊佐「いやそういう意味じゃなくて」

来実「お母さんは若くないよ。今年で35だ

し」

伊藤「え？」

と思わず一同、恵子を見る。

恵子「よく若く見られるんですよ」

古田「いやでもしっかりしてる。うちの孫な

んか…あ」

大内「どうしました？」

古田「早く帰らないと！ 今日孫の誕生日
なんだよ！」

伊藤「え、急いでたのって仕事じゃないんで
すか？」

古田「うるさい、どうにかしろ！」

伊藤「どうにかしろって言ったって」

恵子「私たちもそろそろ帰らないと」

真奈「お腹すいた」

古田「ほら、お客様もこう言ってるんだぞ」

伊藤「そう言われても」

遊佐「(ため息) じゃあこれ使いますか？」

と遊佐、二つ折りの携帯を取り出す。

伊藤「え、なんで？」

遊佐「おれ、2台持ちなんで」

古田「どうして今まで出さなかったんだ？」

遊佐「いや、まあ、なんとなく」

大内「でもこれで助けは呼べるんですよね」

伊藤「よし、じゃあそれで：」

真奈、遊佐の携帯電話をサラリと奪い、
パキッと折る。

遊佐・伊藤「あああつ！」

古田「なにやっ取るんだ、キミ?!」

真奈「(遊佐に)なんで隠してたの?!」

遊佐「別に隠してねえよ。てか、なに折って
んだよ！」

真奈「やっぱり浮気してんだ」

遊佐「してねえよ」

真奈「じゃあなんで」

遊佐「そうやって疑うからだろ」

真奈「これじゃあ携帯変えたって、意味ない

じゃん！」

大内「あ、そういう理由で」

遊佐「まあま、今はそれどころじゃないし」

真奈「もういい！」

真奈、みんなの輪から離れていく。

遊佐「ちよ、待てよ！」

一同が注目する中、追いかける遊佐。

来実「バレるような浮気してちやダメよね」

大内「…ホントしっかりしてるなあ」

恵子「結局、どうしましょう？」

伊藤「うーん、誰かが屋上に上がってくれば
異変に気付くと思うんで」

古田「そんなの待ってられるか！」

伊藤「そんなこと言ったって、しょうがない
じゃないですか」

来実「ねえ！ メダルゲームやりたい」

恵子「はいはい」

恵子、財布から千円札を出し

恵子「じゃあこれでもうちよつと遊んでて
と来実に渡す。

来実「ありがとう！」

来実、ゲームコーナーへ走っていく。

恵子「あの、本当にどうにもならないんです
か？」

古田「ほら、お客様も困ってるだろ」

伊藤「でも他に…そんなすぐじゃないとマズ
いですか？」

恵子「まあ、その…これからちよつと、家族
旅行に」

古田「（わざとらしく）それは大変だ！ 伊

藤君！！」

伊藤「少しは社長も考えてくださいよ！」

古田「それはお前の仕事だ！」

伊藤「そんな仕事仕事言われても」

大内「あの、ガラスを割って、こっち側から
シャツターをこじ開けるっていうのは」

古田「お、それだ！ 伊藤君」

伊藤「ええ？：こじ開けるんですかあ」

古田「もういいだろ。諦めろ」

伊藤「でも道具がないし」

古田「用具室になんかあるだろ」

伊藤「：はい。じゃあ、行こうか」

大内「え、僕も？」

伊藤「言い出しっぺだから」

○同・用具小屋前

小さな用具小屋の前に立つ伊藤と大内。

伊藤「あ」

大内「どうしたんですか？」

伊藤「ここで、待ってて」

大内「え、なんで」

伊藤「いいから、やっぱり」

大内「はあ」

伊藤「ここで待ってて。ね？」

大内「…はい」

伊藤、素早く中に入っていく。

大内「…。」

遊佐「（の声）だから！ 違うって言ってる

だろ！」

大内「！」

遊佐の声に大内が用具小屋の裏手を見

ると、遊佐と真奈の揉めている姿。

真奈「じゃあ、なんで？」

遊佐「こっち（折られた携帯）でしか繋がっ

てないヤツとかいたんだよ」

真奈「女？」

遊佐「男だって」

真奈「別に教えとけばよかったでしょ。新し

いほうも」

遊佐「いちいちめんどくせえじゃん」

真奈「へえ…。だから解約しないで持ってたんだ」

遊佐「安いし：そんなあれじゃねえし」

真奈「（短い溜息）信じられない」

遊佐「じゃあ、どうすれば信じてもらえんだよ！」

真奈「そんなの、自分で考えれば？」

2人のやりとりを真剣に覗く大内。

伊藤「（小声）うわあ、めっちゃ修羅場」

と大内の後ろから顔を出す伊藤。

大内「あ。ありました？」

伊藤「ない。その代わり、ほら」

伊藤の手に持たれた布の塊。

大内「なんですか、これ？」

伊藤「垂れ幕。これの裏に助けを書いて屋上から掛ければ誰か来てくれるでしょ」

大内「…そんな」

× × ×

古田「そんなみつともない真似できるか！」

元の場所に戻ってきた伊藤と大内に怒

りを表す古田。

伊藤「でも」

古田「いいから壊すもの持って来い！」

伊藤「なかったから持ってきたんですよ」

古田「だったら、もっとマシなこと考えろ」

伊藤「実は…もう一つアイデアがあるんですけど」

古田「なんだ？」

伊藤「アドバルーンをです」

古田「一緒だろ！」

恵子「ようは下の人に気付いてもらえればいい
いんですよね？」

大内「でも声は届かないし、垂れ幕はちよつ
とアレですし」

伊藤「下にいる通行人が屋上に注目すること
なんてなかなか…」

恵子「そうですねえ。飛び降りようとして
る人でもない限りそんなこと」

伊藤と古田の視線が大内に移る。

大内「え…なんですか？」

古田「キミ、名前は何ていうんだっけ？」

大内「…大内ですけど」

古田「大内君、頼むよ」

伊藤「いやいやダメですよ、社長！ 結局デパートの評判が」

古田「フリだよ、フリ！ 金網の向こう側まで行けば注目されるだろ！」

恵子「あの、何の話？」

伊藤「そんなこと言って責任を屋上のせいに
して閉鎖する気でしょ？！」

にらみ合う伊藤と古田。

大内「多分、僕に飛び降り自殺の振りをさせようとしてるんだと思います」

恵子「どうして、あなたに？」

大内「僕が…本当に自殺しようとしていたから」

恵子「え、それは」

伊藤「そもそもですよ、お客様にそんなこと
させていいんですか？！」

古田「自殺しに来た奴は客じゃない！」

伊藤「買い物しない客は客じゃないってこと
ですか？！ そんなのデパートじゃ」

古田「違う！ 私が言いたいのはそんなこと
じゃない。こいつはうちのデパートで死の
うとしたんだぞ！」

と大内に指をさす、古田。

大内「…。」

古田「こいつはそれでうちにどれくらい損失
が出るかなんて考えてないんだ。ホントに
死なれてみる。俺がどうこうしなくたって
…屋上は閉鎖だ」

伊藤「…。」

古田「だが伊藤。ここで彼が自殺の振りをし
て、お前が助けたってことにしたら、明日
からヒーローだぞ？」

伊藤「…ヒーロー？」

古田「ああ、悩める若者を救ったデパートの
屋上管理人。マスコミが来て話題沸騰。屋
上の閉鎖も免れ、お前は一躍時の人だ…女
からもモテるぞ」

伊藤 「（大内のほうに振り返り）大内君！」

恵子 「ちよつと待って！」

古田 「なんですか？」

恵子 「そんなのダメに決まってるでしょ！」

伊藤 「え、でも他に方法が」

恵子 「そんなウソつかせませんよ」

古田 「あなたにそんな権利はない」

恵子 「あります」

伊藤 「なんで？」

恵子 「私、フリーのライターですから」

古田 「…マスコミか」

恵子 「現場に記者がいるんです。私の情報と

あなたたちの話…世間はどっちを信じると

思います？」

伊藤 「それは…」

古田 「あなただって早く帰りたいんじゃない

のか」

恵子 「でも私は」

恵子、言葉に詰まりこぶしを握る。

恵子 「いえ、すいません。でもそれでは彼が

あまりにも可哀想で：」

大内に注目する3人。

大内「ごめんなさい。社長さんの話を聞いて、僕の考えがどれだけ浅いか思い知りました。死ぬなら：誰にも迷惑かけずに死のうと思います」

一同「：」

古田「（動揺）いや、そういうことじゃないんだよ？ 大内君」

伊藤「そうだよ、死ななくて済むなら死なないほうがいいわけで」

大内「でも」

恵子「そもそもなんで自殺しようなんて思ったの？」

大内「：それは」

伊藤「浪人生なんだよね？ きつと親が厳しくてそれが嫌になって」

大内「：それもありますけど」

古田「女か？ 女に振られたのか？」

大内「まあ：それも」

恵子「あと考えられるのは、イジメとか？」

大内「それもあります」

伊藤「借金？」

大内「それも」

古田「いくつあるんだよ?!」

大内「親は厳しいし、ずっとイジメられてたから、いい大学に入って見返してやろうと思ったんですが、志望大学は何一つ引っかけからず、片思いしていた女の子にはあつきりと振られ、やけになってギャンブルに走ったら、あつという間に借金が増えて…」

恵子「今に至ると？」

大内「はい」

伊藤「確かに、色々あったね」

古田「で、借金はいくらあるんだ？」

大内「…50万円です」

伊藤「は？　そんだけ？」

大内「親にバレたらって思うとそれでも十分怖くて」

恵子「そっか…」

古田「よし、わかった。その借金は私が肩代わりしてやる」

大内「え、社長さんが？」

古田「その代わりさっきの話だ。大内君は親にバレずに借金が返せる。私は孫の誕生日に間に合う」

伊藤「そして僕はヒーローってわけですね」

古田「それは：その記者さん次第だろ」

恵子「：それなら私はここにいなかったことにします。記事も書かない代わりに、なにも言わない」

古田「十分です。（大内に）どうする？」

大内「：金網を、越えるだけなら」

伊藤「よし！ これで屋上も無くならず」

来実「（の声）あっ！！」

来実の声に反応する一同。

少し離れた所にいた来実が一同の後ろを指さしている。

示したほうに振り向くとそこには

遊佐「真奈！」

真奈「来ないで！！」

既に金網の向こうにいる真奈と内側に
いる遊佐。

2人のもとに駆け寄る一同。

伊藤「ちよ、なにがどうなってんの？！」

遊佐「それが：ちよっと目を離れた隙に」

真奈「結局、透は私のこと好きじゃないんで

しょ」

遊佐「そんなことねえよ！」

真奈「ウソ：」

うつむく真奈。

雨が降り出してくる。

恵子「あ：」

来実「あめだ！」

大内「とりあえず戻ってきませんか？！ 危

ないですし：それ、僕の仕事なんで！」

古田「そんなこと言ってる場合か！ キミ、

何をしてるかわかっているのか」

真奈「すいません。でも私、もうどうでもいい
んです」

遊佐「どうでもいいってなんだよ！」

真奈「どうでもいいはどうでも」

恵子「バカなことはやめなさい！」

真奈「…」

恵子「そんな男に浮気されたくらいで死ぬだ
なんだって」

真奈「あなたみたいにキレイで、幸せな家庭
を持つてる人には…わからないんです」

恵子「でもそれであなかが諦めることなんて
何もない！」

遊佐「真奈！ 俺が悪かった！ いやナニも
悪いことはしてないんだけど！ とにかく

悪かったよ！」

真奈「…さよなら」

真奈、フェンスに背を向ける。

伊藤「あ！ 僕、キレイじゃないし、独身な
んでしゃべっていいですか？！」

古田「伊藤君？！」

真奈「…」

伊藤「死にたいなら飛び降りてもいいけど、

どうせ死ぬなら、ちゃんと彼の話を聞いてから死んでもいいんじゃないのかな？」

古田「お前、今更なにを」

伊藤「（小声）社長、垂れ幕」

古田「はあ？」

伊藤「（小声）垂れ幕、持ってきてください。早く！」

古田「垂れ幕なんて」

大内「そうか！（遊佐に）すみません、手伝ってください」

遊佐「え、でも」

伊藤「その大内君なんていじめられて受験に失敗して女に振られて借金までしてるんだぞ！ それなのに生きていこうとしてるんだ！」

伊藤の話の背中を聞いている真奈。

真奈「私には、関係ない、です」

伊藤「：うん、そうだね、関係ないよ。僕にだって関係ない。それでも目の前で死なれるのはいい気分じゃないよ。それにキミの

後ろには、今、小さい女の子も見ている。

その女の子に嫌な記憶を残してまで、キミは死にたいのか？」

真奈「…」

伊藤「死ぬのは今じゃなくても出来るよ。

だから、ちゃんと彼の話を聞いてみなよ。

死ぬのはそれからだって遅くないって」

真奈「…本当にそう思いますか？」

伊藤「思うよ。人間誰だって悪いほうを本当

だって信じたくなるもんだ。話してみると

案外、つまらないすれ違いだって時もなく

さんある」

真奈「でも」

伊藤「でもここまでやって今更引き返すのも、

バツが悪いでしょ？」

真奈「…」

伊藤「だから」

大内「今です！」

真奈「！」

真奈の目の前に、突然白い垂れ幕。

伊藤「とりあえず強引に戻すことにするか

ら

真奈を左右で挟むように大内と遊佐が、
フェンスの外側に降り立っている。

2人で垂れ幕の四隅を持ち、間にいる
真奈が落ちないように壁を作っている。

古田「よし、うまくいった！」

真奈、横にいる遊佐に視線を移す。

真奈「…透」

遊佐「真奈…」

垂れ幕を持ったまま真奈に近づく遊佐。

遊佐「怖いな、ここ。こんな怖い思いさせて
たんだな」

真奈「…」

遊佐「お前がそこまで俺のこと好きだなんて
思ってなかったんだ。だから俺、不安で…
でもホントに浮気はしてない。それにもう、
隠し事もしないよ」

真奈「ホントに？」

遊佐「ああ…約束する」

真奈「透：」

垂れ幕を置き、抱き合う2人。

古田「（金網越しの大内に）おい！ 通行人、

こつち見てるか？！」

屈んで下を見る大内。

大内「ダメです！」

伊藤「え、なんで？！」

大内「みんな傘さしてます！」

ガツカリする古田と伊藤。

× × ×

屋根の付いているゲームコーナーに全

員移動している。

伊藤がタオルを持って走ってくる。

伊藤「（みんなにタオルを渡し回りながら）

これ、使ってください」

恵子「すいません。ほら、来実ちゃん」

来実「わあ！」

と頭からタオルをかけられ、はしゃぐ。

最後に遊佐と真奈にタオルを渡す伊藤。

真奈「本当に、すいませんでした」

遊佐「すみません」

伊藤「いや気にしないで。元はと言えば、帰れないせいなんだから。ね？」

大内「あ、はい。あの、でもこの場合、50万のほうは：」

古田、タオルで顔を拭いていると

古田「なんだこれは?!」

と、顔をぬぐう。

伊藤「ああ、すみません。ネコの毛が付いてるかも」

古田「またあのネコか：くそ、あいつさえいなければ今頃」

恵子「振り出しに戻っちゃいましたね」

伊藤「自作自演もダメとなると、もう手が」

来実「(恵子に)ねえ、来実ちよつと寒い」

大内「ああ、4月でも服がぬれてると確かにちよつと冷えるよね」

伊藤「倉庫に暖房器具もあるんで、取ってき
ます」

遊佐「あ、じゃあ俺も手伝います！」

伊藤「いやいいよ。そんな大きいじゃないから」

古田「なんで屋上にそんなものあるんだ？」

伊藤「足元用に。冬はいつも寒いんで」

古田「それじゃあ、全員使えないだろ」

伊藤「じゃあ、たき火でもしますか？」

古田「（ため息）お前はそうやってすぐフザけるから」

真奈「あ」

遊佐「なに？」

真奈「いやダメかもしれないけど、狼煙（のろし）っていうのはどうかなって？」

大内「ああ！」

恵子「確かにそれなら遠くの人でも気付いてもらえるかも」

来実「のろしって？」

大内「煙を炊くんだよ。それで助けを呼ぶんだ」

古田「伊藤君、何か燃やせるもの」

伊藤「でも狼煙にするなら木とかじゃないと

ダメですよ。木はちよつと」

遊佐「（濡れてない）そのベンチは？」

伊藤「それを壊せるものがない」

大内「それがあつたらシャツター壊せてます
もんね」

真奈「あの…私、シャツターは無理ですけど
ベンチくらいなら」

伊藤「は？」

× × ×

真奈「はっ！！」

ベンチの座る部分の板（タオル敷き）
を拳で打ち抜く真奈。

一同「…。」

来実「（拍手）すごおい！」

勢いに乗ってドンドンと壊していく真
奈。最後にはパイプと木の束（たば）
が出来あがる。

真奈「ふう。こんな感じでいいですか？」

伊藤「あ…うん。いいんじゃないかな。ねえ、
社長」

古田「ああ……。いいと、思います」

真奈、不安げに遊佐の顔を見る。

遊佐「…こんな特技、あったんだ」

真奈「ごめん、私も隠し事してたみたい」

遊佐「うん…なんだ、その、気にすんなよ」

伊藤「（小声）良かったね、色んな意味で」

遊佐「（小声）はい」

大内「じゃあ、あとは燃やすだけですわね」

古田「伊藤君、火」

伊藤「え、持ってないですよ」

恵子「誰かタバコ吸う人とか」

遊佐「いや、俺は」

真奈「私も」

大内「僕は未成年なんで」

来実「私もすわなーい」

古田「まさか」

伊藤「火いが…ないみたいですね」

古田「倉庫に」

伊藤「ないです」

大内「でも暖房器具っていうのは？」

伊藤「ああ、電気ストーブだから」

真奈「え、じゃあ、これは…」

足元に積まれたベンチの残骸に呆然と
なる一同。

古田「なにかあるだろう、火をつけるものく
らい」

来実「虫眼鏡でねえ、火が付くんだよ」

遊佐「おお、頭いいなあ」

大内「晴れてたら良かったんですけどね」

来実「あとはねえ、木の棒でこするんだよ」

と木の切れ端でこすりだす来実。

古田「伊藤君」

伊藤「いやいやムリですよ！」

真奈「保育園なんですよね？」

恵子「ええ」

真奈「可愛いなあ」

としゃがんで一緒に木で遊ぶ真奈。

遊佐「でもホントいろいろ知ってるよなあ。

俺がガキの頃と全然違う」

真奈「そりゃ透とは違うでしょ」

大内「やっぱりほら、お母さんの仕事が記者
さんだから」

真奈「え、そうなんですか？ 凄い！」

恵子「いやそんな、別に」

来実「お母さんはお仕事してないよ。今日も
家でゴロゴロしてるもん」

大内「え？」

恵子「来実ちゃん」

伊藤「家でゴロゴロって」

古田「じゃあ、この人は？」

恵子「…。」

来実「岡さん」

遊佐「おかさん？」

来実「岡さん」

真奈「お母さんじゃなくて、岡さん？」

来実「うん。前にお父さんのお仕事でよくお
うちに来てた、へんしゅーさん」

恵子に注目が集まる。

恵子「あ、前は編集の仕事をしてて、今はフ
リーのライターなんです。今日は、その、

面倒を見るように頼まれて」

伊藤「じゃあ、家族旅行っていうのは？」

恵子「え、あ、それは…」

来実「旅行？」

一同「…。」

緊迫した空気が流れる。

遊佐「まさか…ゆうかつ！」

バシッと遊佐を殴る真奈。

遊佐「いってえ！！」

真奈「来実ちゃん、お姉ちゃんとUFOキャ

ッチャーしよつか？！」

来実「するう！！」

真奈、来実と輪から抜ける。

それを見守る恵子。

古田「何故あなたみたいな人が誘拐なんて」

恵子「…復讐です」

大内「復讐？！」

恵子「不倫してたんです。担当していた作家

と」

伊藤「それが…あの子のお父さん」

恵子「だからあなたたちに（遊佐と真奈）になにか言う資格なんてホントはなかったの。ごめんね」

遊佐「いや別に、そんな：」

遊ぶ真奈と来実を眺める恵子。

恵子「私は苦しんでるのにあの人には幸せな家庭がある：それが許せなかった」

古田「だからといって、あの子を巻き込んでいいわけじゃないだろう」

恵子「そうですね：どちらにしてもバレてしまつたら終わりです。警察にでもなんでも突き出してください」

伊藤「警察って言っても電話がないんじゃない」

恵子、スツと携帯を取り出す。

大内「あ、電話！」

伊藤「でも充電がないって」

恵子「電話が通じないフリーライターなんているわけないでしょ？」

と、古田の前に携帯を差し出し

恵子「どうぞ、使ってください」

古田「…」

遊佐「待ってください！ この人は、真奈が飛び降りるのを止めようとしてくれた」

大内「僕の自殺だってそうです！…この人だけが、僕の話をちゃんと聞いてくれようとしてくれました」

古田「だからなんだ？ 犯罪は犯罪だろ」

伊藤「まだ犯罪にはなってません。このまま岡さんがあの子を家に帰せば」

遊佐「そうだ」

大内「そうですよ！」

恵子「いいんです、私は…」

来実「おかさん、雨やんだよー！」

と来実が恵子のもとに走ってくる。

真奈「（追いかけているが）もー、そんなしたら転んじゃうよ！」

来実「あっ！（と、つまづく）」

恵子「来実ちゃん！！」

来実を抱きかようと携帯から手を離す
恵子。

大内「ああ、携帯が?!」

宙に舞う携帯。

恵子、来実を抱きかかえる。

落下する携帯を遊佐がつかもうとして、
弾（はじ）く。それをまた真奈が弾き、

大内が弾き、古田が弾き、伊藤が弾く。

伊藤「ああ、水たまりに?!」

全員が見守る中、携帯が水たまりに落ちる寸でのところで、ネコが弾いて地面に落ちる。

遊佐「（すぐに拾って）携帯、無事です!」

全員「おおっ!!」

大内「あれは：ニャン吉?!」

伊藤「いやあれは：ネコの助だ!」

古田「ネコの：助?」

来実「ああっ!!」

気付くと10数匹のネコが屋上の至るところにいる。

真奈「凄いいっぱいいる?!」

古田「なんだ?! なんなんだ、このネコの

集団は？！」

大内「…まさか、あの倉庫の中って」

と伊藤のほうに振りむく。

伊藤「あー、さつきちゃんと閉めてなかったのか…」

古田「伊藤、お前！！」

伊藤に詰め寄る古田。

伊藤「すいません、捨て猫とかいろいろ捨てたら、こんな感じに」

古田「やはり屋上は、へい…！」

来実「可愛い！！！」

とネコを抱く来実。

真奈「可愛いねえ」

遊佐と真奈もネコをさわっている。

古田「…」

真奈「いつもこんなにいるんですか？」

伊藤「え、いつもって言うか…その」

遊佐「こいつ、アパート住まいだからネコ飼えなくて」

真奈「ネコカフェとかも高いし、ここに来て

会えるなら私、この屋上通います！」

伊藤「え、でもこの屋上は：」

恵子「あの：捨て猫を保護するという名目なら世論も味方につけられますし、維持費も市から助成金が下りるかもしれません」

古田「なるほど、そういう手もあるか」

伊藤「社長？」

古田、ズカズカと遊佐のそばに行き、

恵子の携帯を奪う。

遊佐「あ」

電話をかけようとする古田。

大内「社長さん、ちよつと待っ：」

止めようとする大内を、ザッと片方の手で制する。

古田「伊藤君」

伊藤「はい」

古田「デパートの屋上は、お前のペット預り所じゃない」

伊藤「：わかってます」

古田「飛び降りをする場所でもなければ、ま

してや：犯罪者を匿う場所でもない」

恵子「…。」

古田、受話器を耳に当てる。

遊佐「（小声）まずい、このままじゃ警察」

大内「（小声）伊藤さん！」

伊藤「（小声）え、これも僕なの?!」

大内「（小声）責任者でしょ?!」

遊佐「（小声）おい、早く」

古田「（電話繋がり）あー、もしもし、私だ。

屋上のシャッターが閉まっているんだ。ち

よつとそつちから開けてくれないか？」

遊佐「…警察じゃ、ない？」

古田「ああ、そうだ。すぐに来てくれ」

電話を切る、古田。

伊藤「…社長」

古田「伊藤君。デパートの屋上は…お客様の

思い出となる場所だ」

ネコと遊ぶ来実。

古田「あの子に罪はない」

伊藤「社長!!!」

抱き付こうとする伊藤を引きはがす、

古田。

古田「ああ、あと：大内君だっけ？」

大内「あ、はい！」

古田「明日からここでバイトするんだ」

大内「バイト？」

古田「その代わり50万は前借さしてやる」

大内「は、はい。わかりました！」

遊佐「え、でも明日からって：？」

伊藤「それじゃあ、閉鎖は」

古田「ただ屋上にネコがいるだけじゃお客様

は来ない。大切なのは宣伝だ」

伊藤「宣伝？ それこそ、そんな予算」

古田「それは：その記者さん次第だろ」

恵子に視線が集まる。

恵子「：ええ、協力させてもらいます」

伊藤「やった！！」

大内「良かったですね！！」

古田「喜ぶのはまだ早いぞ。売上が上がらな

けば、即へい：」

来実「あっ！」

来実が指をさす出入り口のシャッター
がゆっくりと開いていく。

真奈「シャッターが！」

窓ガラス越しに見える三毛猫。

伊藤「閉鎖にはさせません。屋上は：お客様
の思い出となる、場所なんでしょ？」

古田「（鼻で笑い）そんなこと言って、忙し
くなったらまた文句言うんだろ」

伊藤「言いませんよ。そんな時は（窓ガラス越
しのネコをあごで示す）また借りますから」

窓ガラスにピタリとつく猫の手。

（おしまい）